

第2節 将来についての意識

1. 将来像

4分の3以上の子どもが、40歳くらいになったとき「幸せになっている」と答えている。また、子どもや親に囲まれてのんびり暮らしているイメージはあるが、社会的成功や社会貢献をしているイメージはあまりないようである。

◆身近な人、のんびりした生活を大切にしたい 幸せな未来

子どもたちは、自分たちの将来をどう思い描いているのであろうか。2009年調査では、「あなたが40歳くらいになったとき、次のようなことをしていると思いますか」という設問が新しく加わった。その結果が図4-2-1である。4分の3が、「幸せになっている」に「とてもそう思う」+「まあそう思う」と答えており、多くの子どもが自分の未来に漠然と肯定的・楽観的な展望を持っている。

さらに、具体的な将来像では、「親を大切にしている」が7~8割、「子どもを育てている」が6~7割と、身近な他者との親密な関係を重視する傾向の項目で選択率が高い。ついで、「自由のんびり暮らしている」が6~7割である。

このような自分の身近な人やのんびりした生活を重視した将来像に対して、自身の野心を満たしたり、社会貢献したりという将来像は希薄なようである。「多くの人に役に立っている」「お金持ちになっている」「有名になっている」「世界で活躍している」は、半数以下となっている。ただし、そのような志向性はあっても実現できると思い描けていないのか、志向性自体が希薄なのかは、検討が必要である。

◆中学生はのんびりしたい？

学校段階に注目してみると、多くの項目で、中学生でいったん減ったあと、高校生で増加する。ただし、「自由のんびり暮らしている」のみ、中学生で突出している。中学生は疲れているのであろうか。

高校生で増えるのは、「子どもを育てている」と「多くの人に役に立っている」である。逆に、「有名になっている」は中学生で減ったあと、他の項目とは異なり高校生でさらに減っている。年齢が上がり、現実的に考えるようになっていくのかもしれない。

◆将来の家族像が描けないと

「幸せになっている」と思えない

「幸せになっている」と他の具体的な将来像の関係をみたのが図4-2-2である。

すべての項目で、具体的な将来展望が持てていないほど、「幸せになっている」の選択率が下がっており、具体的な将来展望を持てるか否かと、漠然と将来幸せになっていると思えるか否かは関係している。

興味深いのは、なかでも「親を大切にしている」と「子どもを育てている」で、「あまりそう思わない」+「ぜんぜんそう思わない」(図中では「い

いえ)と、「幸せになっている」と答える割合が極端に低くなっていることである。いろいろな将来像のなかでも、とりわけ親や子どもに囲まれた暮らしが想像できないと、将来が幸せであると想像しにくいようである。

前述のようにこの2項目は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の選択率自体も高い。その上、現代の子どもにとって、野心や社会貢献よりも

家族との幸せな未来が、将来の幸せの決め手として重要な意味を持つようである。ここから、現代の子どもたちは将来像として、親密な関係性を重視し、野心や社会貢献への志向性自体が希薄である可能性が示唆できる。

なお、学校段階による違いがみられなかったため図4-2-2では中学生のデータのみ使用している。

図4-2-1 将来像（学校段階別）

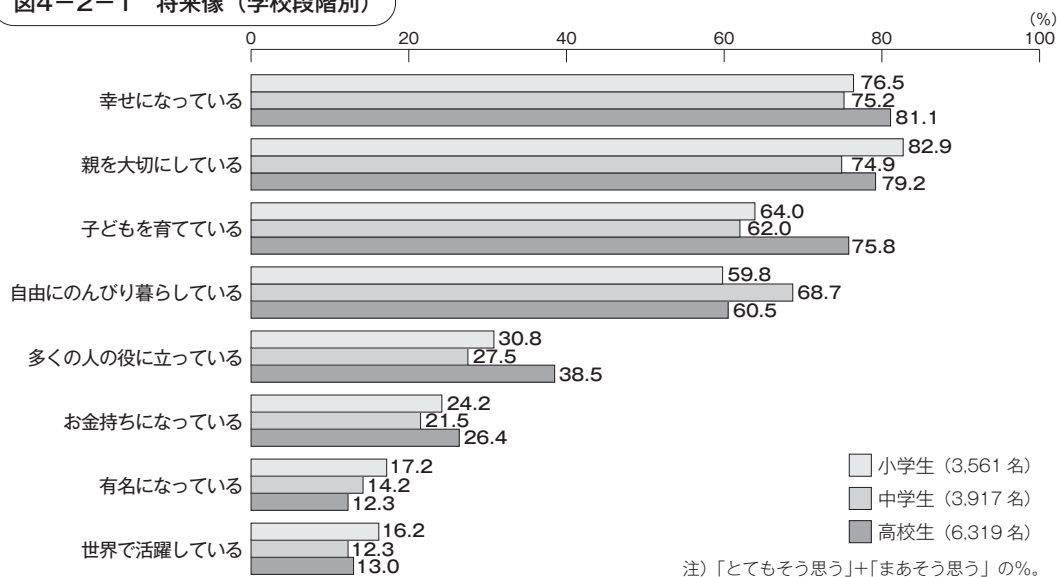
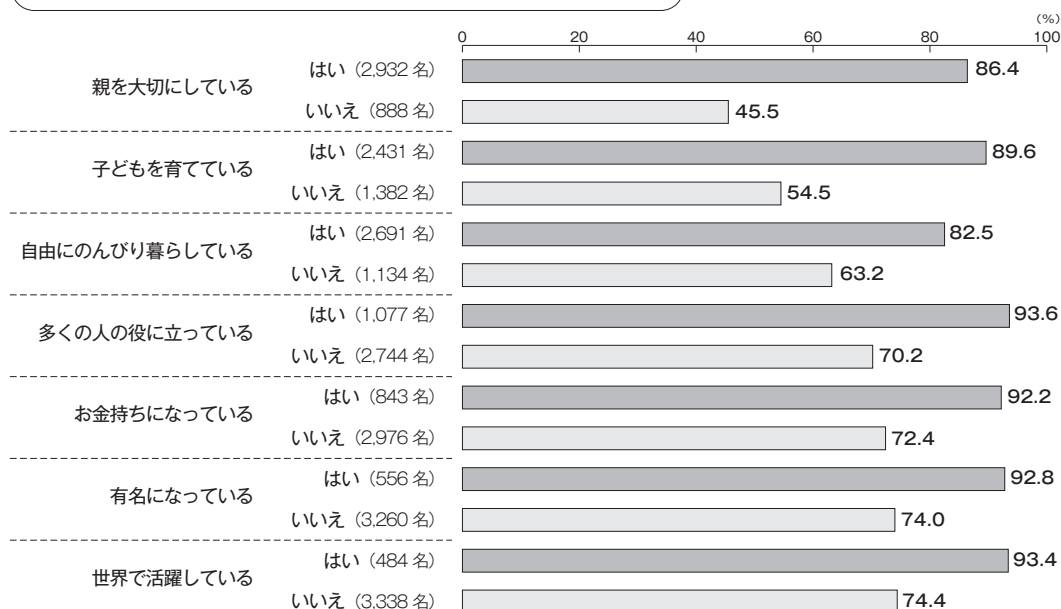


図4-2-2 将来像別に見た「幸せになっている」（中学生）



注1) 「幸せになっている」で「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) 各項目について、「はい」は「とてもそう思う」+「まあそう思う」、「いいえ」は「あまりそう思わない」+「ぜんぜんそう思わない」とした。

第4章 現状・将来についての意識

◆男子のほうがやや野心的だが楽観さに欠ける

次に、男女ごとにみたのが表4-2-1である。全体としては少数派の「お金持ちになっている」「世界で活躍している」「有名になっている」はすべての学校段階において、男子で多くなっている。未だ少数派とはいえ、男子のほうが野心を持っているといえる。それに対して、女子のほうは、「子どもを育てている」「親を大切にしている」「自由にのんびり暮らしている」（小・中学生のみ）といった身の周りの幸せをいっそう重視する傾向がみられる。また「幸せになっている」は女子のほうが多く、女子のほうが将来に希望を持ちやすいといえる。

◆豊かな子ども時代が将来の展望を見せる？

なお、紙幅の都合で図表を割愛するが、いくつかの項目が、将来展望を左右している。

第1に、成績（高校生は高校偏差値層）がよいほうが、「自由にのんびり暮らしている」を除いたすべての項目で「そう思う」が多い。第2に、なりたい職業が「ある」ほうが、同様に「自由にのんびり暮らしている」を除いたすべての項目で「そう思う」が増える。現在の成績に加え、具体的な目標や夢を持つことが、将来展望を開かれたものになっている。

第3に、小さいころから今までに「経験をしたこと」であてはまる項目数が多く、親の文化度が高いと、多くの項目で全般的に「そう思う」が多くなる（親の文化度は、「家でお父さんはパソコンを使う」「家には本（マンガや雑誌以外）がたくさんある」「親は毎日、新聞を読んでいる」「お父さんは大学や短期大学を卒業している」「お母さんは大学や短期大学を卒業している」にあてはまる項目数で判断した）。経験豊富で文化に囲まれた子ども時代を過ごせるほうが、積極的な将来展望につながっている。

第4に、父母との会話が早いほど、「子どもを

育てている」「親を大切にしている」「多くの人の役に立っている」「自由にのんびり暮らしている」といった身近な幸せを示す項目の選択率が高い（会話は、父母それぞれについて「話をする」項目数で判断した）。実体験として身近な人とのかわりが満たされていると、未来もそのようなものとして思い描きやすいといえる。

◆勉強と自分への自信が将来展望につながる

現在の生活への満足度と将来展望の関係をみたのが表4-2-2である。

「自分の性格」に満足していると、一貫して、ほぼすべての項目で「そう思う」が多くなる。「現在の自分の成績」への満足も、小学生ではすべての将来展望を、中学生では他人との関係性を重視する将来像を、高校生では自分が活躍する将来像を増加させている。成績や性格に自信が持てると将来展望につながるといえる。

表は省略するが、「家族との関係」「友だちとの関係」「学校の先生との関係」「自分が通っている学校」「自分が住んでいる地域」に満足していると、「子どもを育てている」「親を大切にしている」「多くの人に役に立っている」「幸せになっている」といった身近な他者を大切にする将来像や「自由にのんびり暮らしている」の選択率が高い。身近な人間関係や生活に満足していれば、「将来も満足したい、満足しているにちがいない」と思えるのであろう。

また、「今の日本の社会」に満足なほど、「幸せになっている」（小・中・高校生）ほか、「世界で活躍している」（小学生）、「親を大切にしている」「子どもを育てている」「お金持ちになっている」（以上、中・高校生）、「自由にのんびり暮らしている」（中学生）の選択率が高い。社会に不満が少ないと不安なく生活を思い描け、野心的になったり逆に楽観的になったりもできるようである。

表4-2-1 将来像（学校段階別・性別）

(%)

	小学生		中学生		高校生	
	男子 (1,814名)	女子 (1,745名)	男子 (2,012名)	女子 (1,896名)	男子 (3,306名)	女子 (3,005名)
幸せになっている	72.4	< 80.7	72.0	< 78.7	78.7	< 83.9
親を大切にしている	79.3	< 86.6	70.0	≪ 80.0	75.2	< 83.5
子どもを育てている	55.9	≪ 72.3	55.8	≪ 68.7	73.9	78.2
自由にのんびり暮らしている	56.1	< 63.7	65.5	< 72.1	61.1	60.0
多くの人の役に立っている	31.3	30.5	28.9	26.0	39.3	37.6
お金持ちになっている	28.7	> 19.6	25.8	> 16.8	30.6	> 21.8
有名になっている	22.3	≫ 11.9	18.5	> 9.6	16.9	> 7.1
世界で活躍している	20.7	> 11.6	16.5	> 8.1	16.2	> 9.5

注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) <>は5ポイント以上、≪≫は10ポイント以上差があることを示す。

表4-2-2 生活満足度別にみた将来像（学校段階別）

自分の性格

(%)

	小学生		中学生		高校生	
	不満	満足	不満	満足	不満	満足
幸せになっている	69.6	≪ 82.9	70.1	≪ 85.0	77.5	≪ 89.7
親を大切にしている	79.9	< 86.1	72.1	< 81.2	77.5	< 84.0
子どもを育てている	60.1	< 67.6	59.9	< 67.1	75.0	79.0
自由にのんびり暮らしている	57.3	< 62.4	67.0	< 73.5	58.8	< 65.2
多くの人の役に立っている	23.8	≪ 36.6	22.3	≪ 36.0	33.9	≪ 48.2
お金持ちになっている	18.7	≪ 29.0	17.0	≪ 28.5	22.4	≪ 34.8
有名になっている	12.7	< 20.8	11.3	< 18.7	9.2	< 18.3
世界で活躍している	11.3	< 20.0	9.3	< 17.1	10.2	< 18.6

現在の自分の成績

(%)

	小学生		中学生		高校生	
	不満	満足	不満	満足	不満	満足
幸せになっている	69.8	≪ 81.9	74.4	< 80.8	81.0	84.1
親を大切にしている	79.3	< 86.1	74.4	< 79.7	79.5	80.6
子どもを育てている	58.1	≪ 68.5	61.8	65.5	76.5	76.0
自由にのんびり暮らしている	56.5	< 62.8	68.7	72.0	59.7	< 66.0
多くの人の役に立っている	25.0	< 34.9	25.9	< 32.9	38.3	40.6
お金持ちになっている	19.7	< 27.4	20.8	24.4	24.9	< 33.3
有名になっている	13.7	< 19.5	14.2	14.9	11.2	< 16.9
世界で活躍している	12.7	< 18.4	12.0	13.9	11.9	< 17.8

今の日本の社会

(%)

	小学生		中学生		高校生	
	不満	満足	不満	満足	不満	満足
幸せになっている	74.0	< 82.3	73.6	< 82.8	79.6	< 86.2
親を大切にしている	82.2	85.5	73.3	< 81.9	77.5	< 84.6
子どもを育てている	62.7	67.1	61.3	< 66.4	74.9	< 79.9
自由にのんびり暮らしている	60.7	59.8	68.1	< 73.9	59.7	63.8
多くの人の役に立っている	29.6	33.3	27.1	29.9	37.8	40.7
お金持ちになっている	23.0	26.9	20.1	< 25.8	24.7	< 30.7
有名になっている	16.3	18.8	13.7	16.1	11.2	14.7
世界で活躍している	14.2	< 19.3	12.0	13.6	12.3	14.7

注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) 各項目について、「満足」は「とても満足している」+「まあ満足している」、「不満」は「あまり満足していない」+「ぜんぜん満足していない」とした。

注3) <>は5ポイント以上、≪≫は10ポイント以上差があることを示す。

2. 結婚後の家事・育児の分担について

現代の子どもたちは、将来、結婚した後の夫婦間の家事・育児分担について、全体的に平等に分担することを希望している。一方、家事・育児を「妻が中心に行う」と考えているのは、いずれの学校段階でも女子が多い。また、母親が働いている家庭の子どもは、平等分担を志向している割合が高い。男子においては、家事・育児にかかわる経験が平等分担志向につながる。

◆結婚後の家事・育児に対する意識は

小学生のころから男女差が明確

現代の子どもたちは、将来、結婚した後の夫婦間での家事・育児分担について、どのように考えているのだろうか。学校段階別・性別による結果を図4-2-3に示した。

全体的には、家事・育児を「夫と妻が同じくらい行う」を希望している割合が高い。学校段階別にみると、小・中・高校生と学校段階が上がるほど、「夫と妻が同じくらい行う」と考える割合が高くなる。「妻が中心に行う」と答えた割合は、いずれの学校段階においても男子より女子で高くなっており、小・中・高校生を通じて約3割の女子が、自分が中心になって家事・育児を行うと考えている。一方、「夫が中心に行う」は、いずれも5%未満の割合となっており、子どもたちには夫中心の家事・育児分担をイメージすることは難しいようである。

また、小学生男子で4割近く、中学生男子で3割近くが「考えたことがない」と回答しており、低年齢の男子は、結婚後の家事・育児分担のイメージを抱きづらいようである。しかし、女子で「考えたことがない」と回答したのは、小学生でも2割強、中学生では1割強となっており、結婚後の家事・育児に対する意識は、低年齢のころから男女差が明確である。

◆現在の自分の家庭を基準として

家事・育児分担をイメージ

このような子どもたちの結婚後の家事・育児分担のイメージに影響を与えているのはどのようなことなのだろうか。ここでは、身近な存在である母親の就業形態によって、子どもたちの家事・育児分担の希望がどう異なるのかを学校段階別・性別に確認した(図4-2-4)。

その結果、学校段階別、性別を問わず、母親が常勤(フルタイム)で働いている家庭の子どもは、パートタイムや専業主婦の家庭の子どもよりも、結婚後の家事・育児は「夫と妻が同じくらい行う」と回答している割合が高くなっており、一方、母親がパートタイムや専業主婦の家庭の子どもは、常勤の家庭の子どもよりも「妻が中心に行う」の回答割合が高い傾向がみられる。

とくに、高校生においては、男女とも平等分担志向が高まりつつも、母親の就業形態の影響を、小・中学生よりも強く受けているようである。

子どもたちは、現在の自分の家庭を基点としたイメージをもとに、結婚後の家事・育児の分担を考えているものと思われる。

図4-2-3 結婚後の家事・育児の分担（学校段階別・性別）

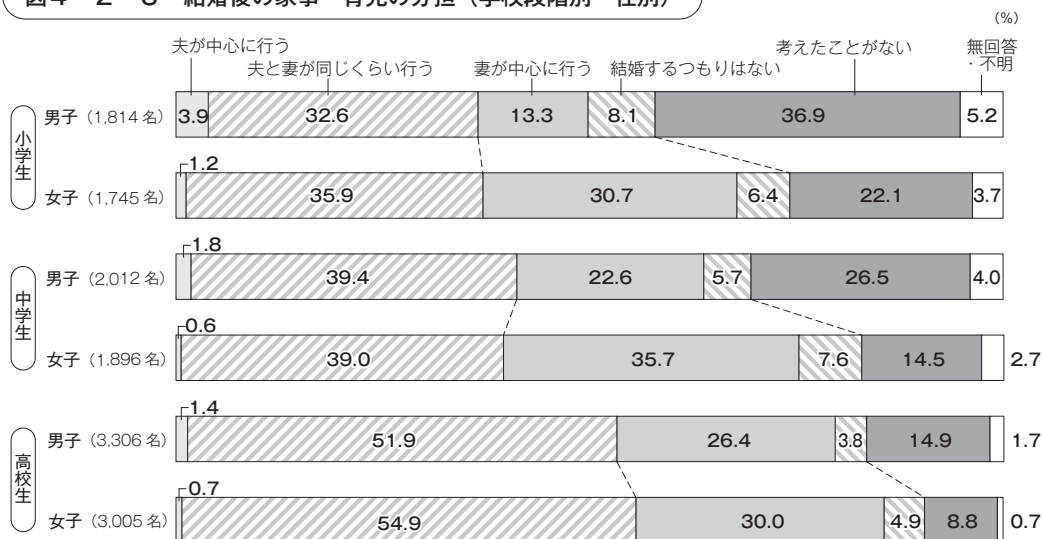
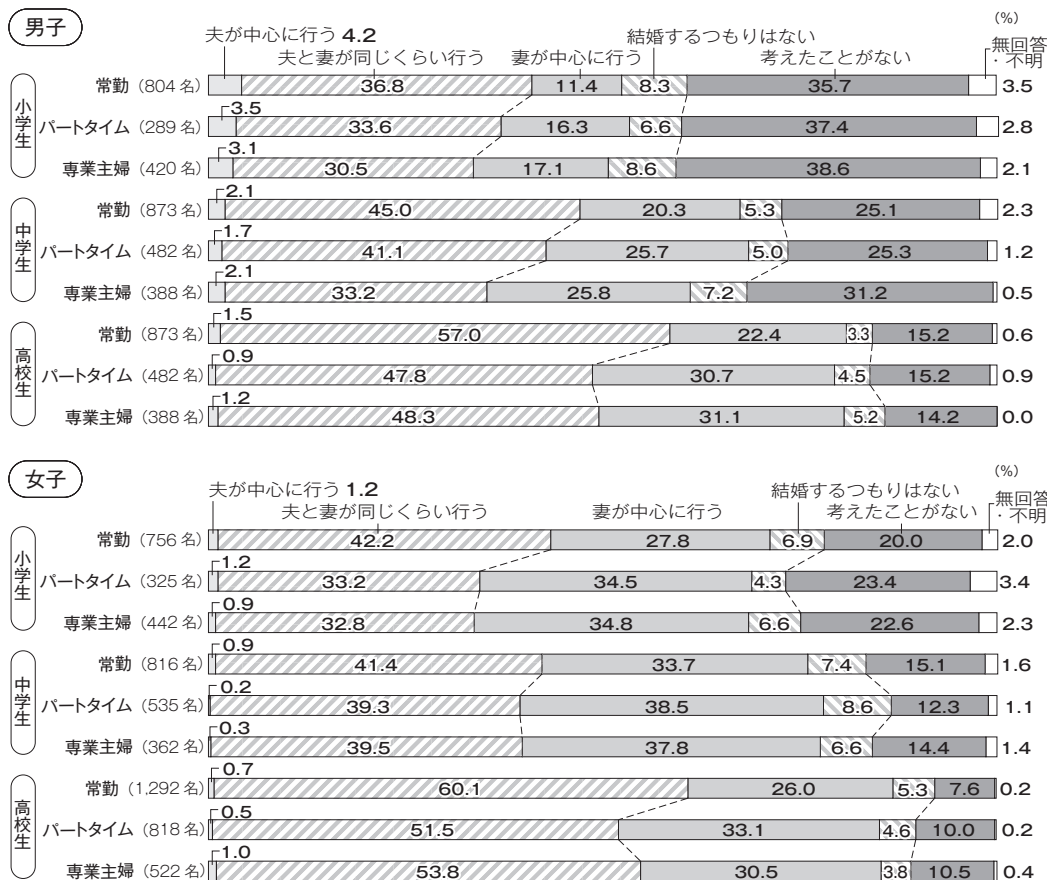


図4-2-4 結婚後の家事・育児の分担（学校段階別・性別・母親の就業形態別）



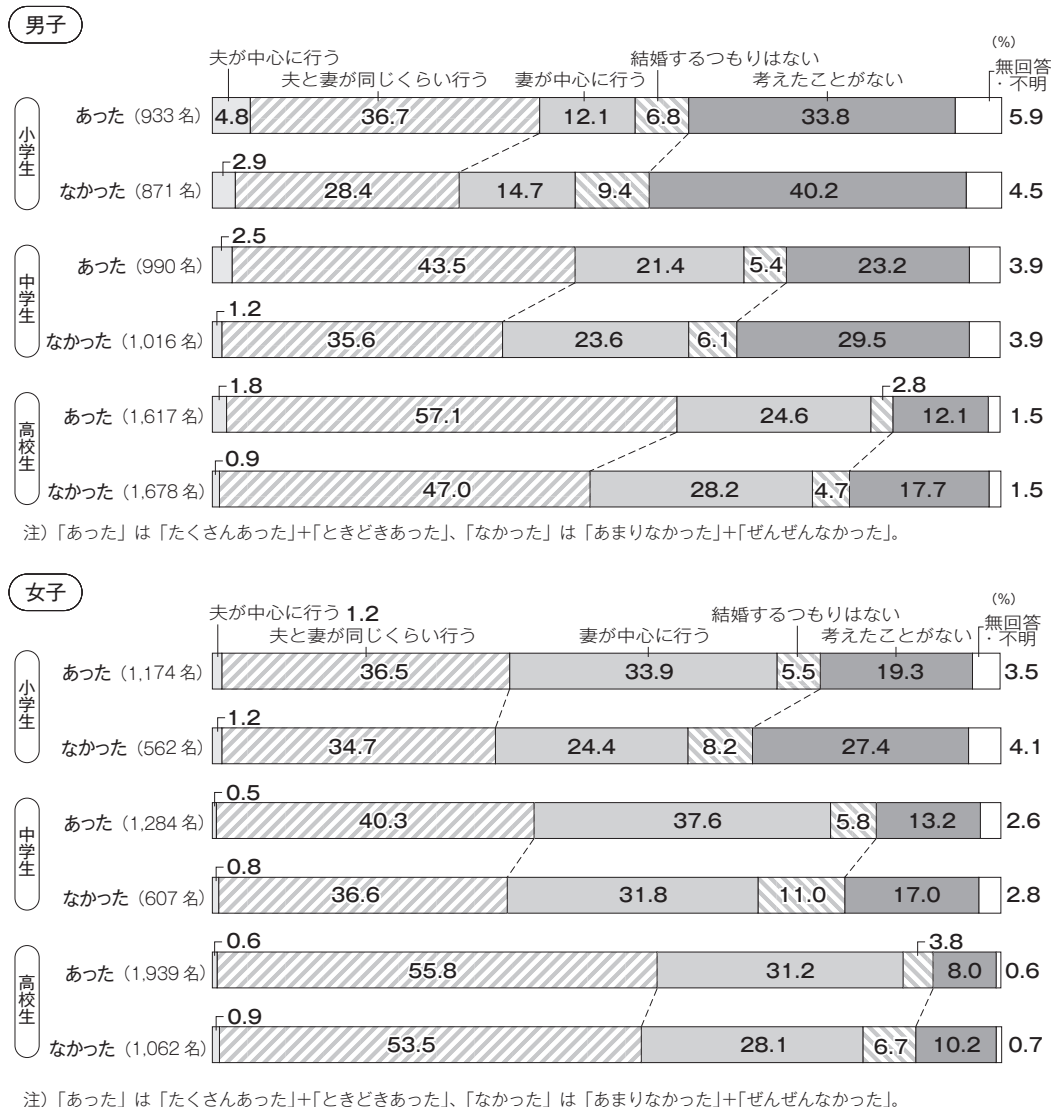
第4章 現状・将来についての意識

◆家事・育児にかかわる経験をしている男子は「平等志向」

家事・育児にかかわる経験やふだんの行動は、子どもたちの将来の家事・育児の分担に対する意識にどのように影響しているのだろうか。ここでは、家事・育児にかかわる過去の経験とし

て「赤ちゃんをだっこしたこと」と、ふだんの行動として「家の手伝いをする」の2つの質問項目を用いて、その経験の有無による将来の家事・育児分担に対する意識の違いを学校段階別・性別でみている(図4-2-5～図4-2-6)。その結果、学校段階を問わず、こうした経験

図4-2-5 結婚後の家事・育児の分担(学校段階別・性別・「赤ちゃんをだっこしたこと」体験の有無)

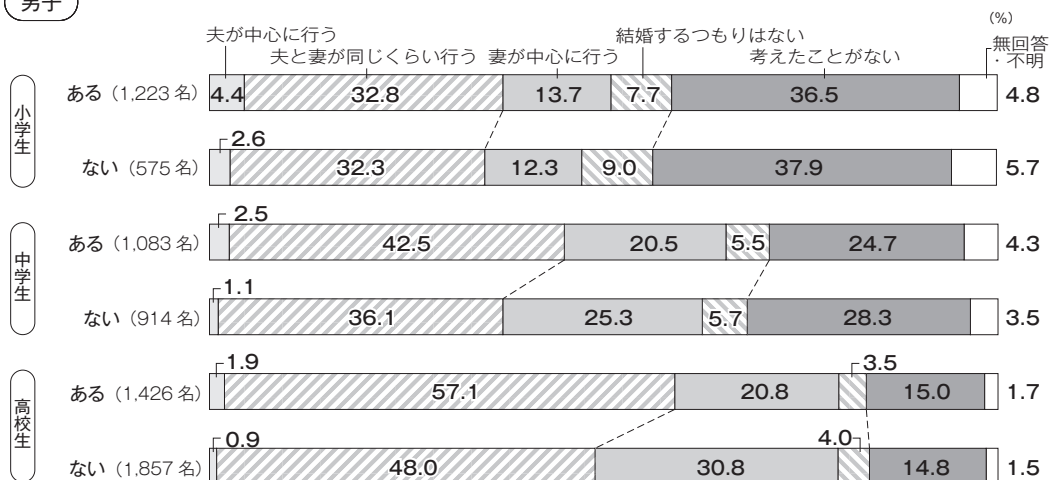


が「あった／ある」と回答した子どものほうが、家事・育児の分担は「夫と妻が同じくらい行う」と考えている割合が高い。男女別にみると、女子では、家事・育児経験の有無と将来の家事・育児の分担希望との関連は、そう強くはないが、男子においては、経験の有無によって「夫と妻

が同じくらい行う」を希望する割合が大きく異なっている。家事・育児にかかわる経験は、男子のジェンダー意識に大きく影響している。

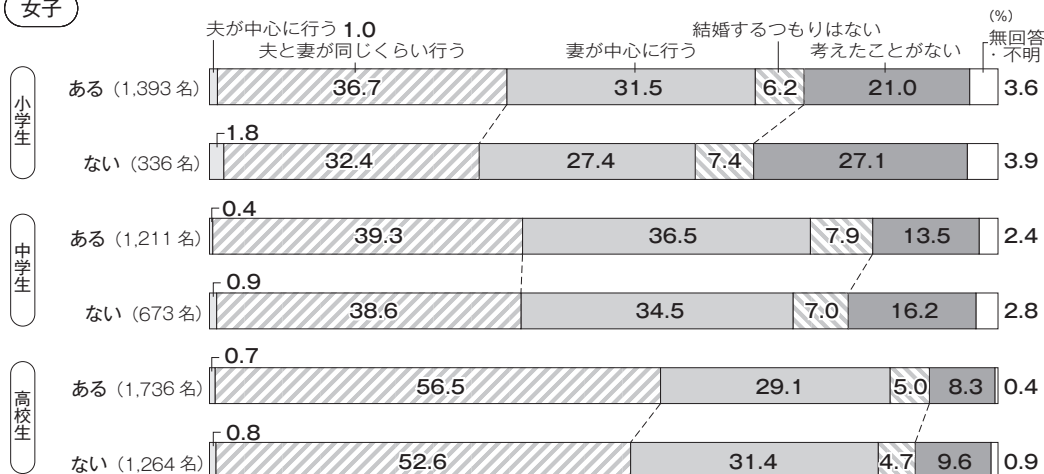
図4-2-6 結婚後の家事・育児の分担（学校段階別・性別・「ふだん家の手伝いをするかどうか」）

男子



注)「ある」は「よくある」+「ときどきある」、「ない」は「あまりない」+「ぜんぜんない」。

女子



注)「ある」は「よくある」+「ときどきある」、「ない」は「あまりない」+「ぜんぜんない」。

3. 将来の職業について（1）

この5年間で、どの学校段階においても「将来なりたい職業」が「ある」と答える割合が減少しており、とくに高校生において、減少の割合が大きくなっている。性別で見ると、小・中・高校生とも、女子よりも男子の減少幅が大きい。男子における減少幅は学校段階が上がるにつれて大きくなり、高校生男子がもっとも「なりたい職業」がなくなってきた。とくに進路多様校の男子においては2割以上も減少している。

◆「なりたい職業」が「ない」子どもが増加

ニート・フリーター問題から引き続かたで、この5年間は、若者と仕事に対する議論やキャリア教育に注目が集まった時期であったといえる。こうした世情の中、子どもたちの職業観はどのように変化したのだろうか。

はじめに「将来なりたい職業」の有無について、5年間の変化をみていこう。学年別の結果を図4-2-7に示した。

全体的に、「なりたい職業」が「ある」の割合が減少している。学年ごとにみると、小学生においては4～7ポイント程度の減少幅で推移しているが、中2生から減少幅が大きくなりはじめ、中3生では2004年と比べて11.0ポイント減（2004年62.5%→2009年51.5%、以下同）、高1生では16.4ポイント減（64.8%→48.4%）、高2生では15.7ポイント減（68.7%→53.0%）と、とりわけ高校生において「なりたい職業」が「ある」の割合が大きく減少している。

◆高校生男子の減少幅がもっとも大きい

それでは、どの層において「なりたい職業」が「ある」の割合が減少しているのかを詳しくみていこう。まず、学校段階別に性別で5年間

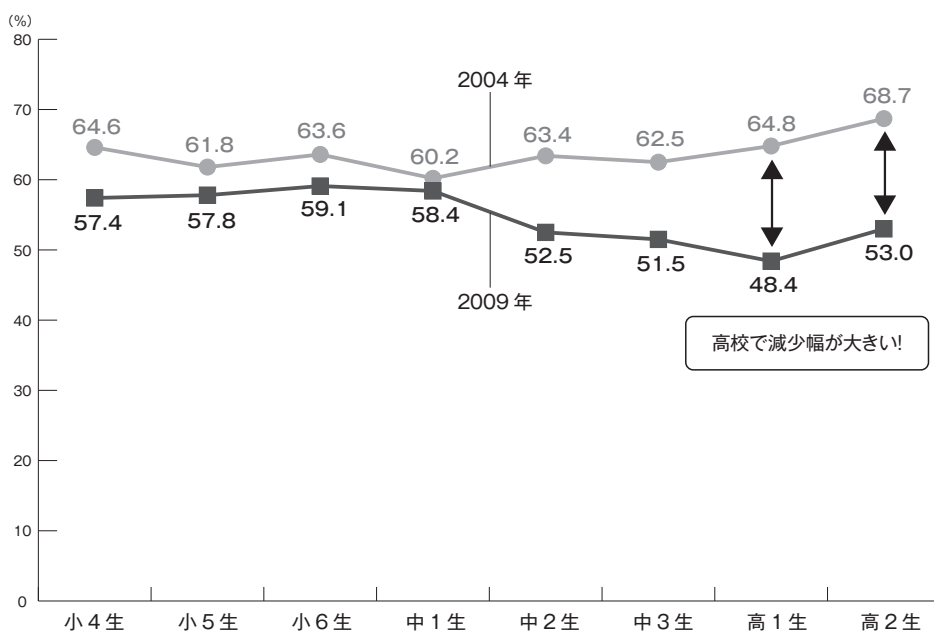
の変化をみてみる（図4-2-8）。

2004年と同様、2009年においても、小・中・高校生を通じて、男子よりも女子のほうが「なりたい職業」が「ある」と回答する割合が高くなっている。女子のほうが早期から将来の職業を意識しているという傾向は、5年前から変化していない。

次に、性別における減少幅に注目してみると、小学生男子では5.8ポイント減（57.8%→52.0%）、小学生女子が4.9ポイント減（69.4%→64.5%）、中学生男子では10.4ポイント減（56.4%→46.0%）、中学生女子が4.7ポイント減（67.6%→62.9%）となっている。高校生になると減少幅は大きくなり、男子で17.5ポイント（61.1%→43.6%）、女子でも14.8ポイント（73.2%→58.4%）減少している。小・中・高校生のいずれの学校段階においても、女子よりも男子の減少幅が大きくなる傾向がみられる。

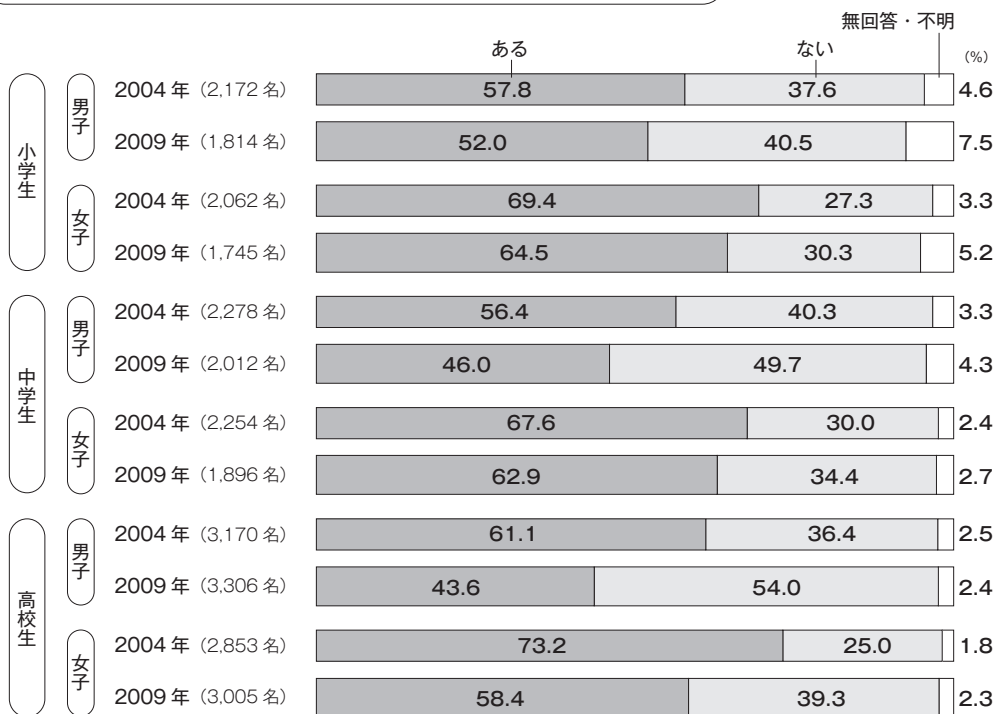
就業に対する危機感が高まった時期にあって、より職業選択を現実的に考える必要のある高校生や、「男性は経済の担い手」というジェンダー規範によって、女子よりも就職へ重圧が大きいと思われる男子において「なりたい職業」がなくなっているという結果となっている。

図4-2-7 なりたい職業はあるか（学年別、経年比較）



注) なりたい職業が「ある」と回答した%。

図4-2-8 なりたい職業の有無（学校段階別・性別、経年比較）



第4章 現状・将来についての意識

◆進路多様校では2割以上減少

学力と「なりたい職業」の有無とは関連があるのだろうか。また、それはこの5年間でどのように変化しているのだろうか。学校段階別に成績（小・中学生）や高校偏差値層（高校生）によって「なりたい職業」の有無がどのように分布しているのかを経年で比較したものが、**図4-2-9**である。

小学生においては、成績上位層ほど、なりたい職業が「ある」と回答している割合が高い。また、この5年間の変化は、成績上位層では、「なりたい職業」が「ある」の割合は40ポイント減（70.6%→66.6%）に対して、成績中位層では5.4ポイント減（61.8%→56.4%）、下位層では、9.2ポイント減（59.9%→50.7%）と成績が低い層ほど減少幅が大きくなっている。

しかし、中学生においては成績との関連はみられなくなり、調査年度における減少のみが際立っている。

高校生においても、高校偏差値層となりたい職業の有無との間に関連はみられない。また、この5年間で「なりたい職業」が「ある」と回答している割合は、進学校で16.7ポイント減（65.6%→48.9%）、中堅校で12.1ポイント減（67.1%→55.0%）、進路多様校では21.8ポイント減（68.7%→46.9%）と軒並み減少傾向にあり、とりわけ進路多様校においては減少幅が大きくなっている。

◆就職への重圧が大きくなると

「なりたい職業」を持ちづらくなる？

減少幅の大きかった高校生を、さらに高校偏差値層別・男女別でみたものが**表4-2-3**である。2004年から減少の割合がもっとも大きいのは進路多様校の男子で、23.9ポイントもの減少（63.1%→39.2%）となっている。

女子に注目してみると、進学校では18.5ポイント減（72.3%→53.8%）、中堅校では6.7ポイン

ト減（73.4%→66.7%）、進路多様校では19.7ポイント減（74.6%→54.9%）となっており、進学校と進路多様校の減少が大きくなっている。

また、中堅校と進路多様校においては、女子よりも男子のほうが「なりたい職業」が「ある」の割合が減少しているのであるが、進学校においては、男子15.2ポイント減（59.8%→44.6%）、女子18.5ポイント減（72.3%→53.8%）と女子の減少幅のほうが大きくなっている。

ここ最近では、急激な景気悪化による若年者の就職難、とりわけ高卒労働市場のさらなる不安定化が深刻になっている。こうした社会経済状況によって、若者の職業選択の幅が縮小されてきている。小・中学生は就職をまだ先のこととしてとらえることができるが、高校生、とくに進路多様校の生徒にとって、就職は目の前の問題である。こうした状況のもとで、就職を現実のものとして考えている生徒ほど、具体的な「なりたい職業」を持ちづらくなっている可能性も考えられる。

また女子にとっては、依然として就職には不利な状況が続いている昨今の状況を考えると、進学校のキャリアに対する意識の高い女子や、就職が目前にせまっている進路多様校の女子にとっても同様のことがいえるだろう。

◆「なりたい職業」の有無と進学希望の関係

さらに高校生に注目し、「なりたい職業」の有無による希望する進学段階の違いをみてみよう（**表4-2-4**）。

なりたい職業が「ない」と回答している高校生が希望している進学段階に注目すると、2009年で6割以上が「大学（四年制）まで」を希望しており、2004年から3.0ポイント増加している（59.6%→62.6%）。大学進学率が上昇し、大学へ行くことが珍しくなくなった社会に生きる高校生たちにとって、大学生活は将来を考える時間となっているのかもしれない。

図4-2-9 なりたい職業の有無（学校段階別・成績／高校偏差値層別、経年比較）

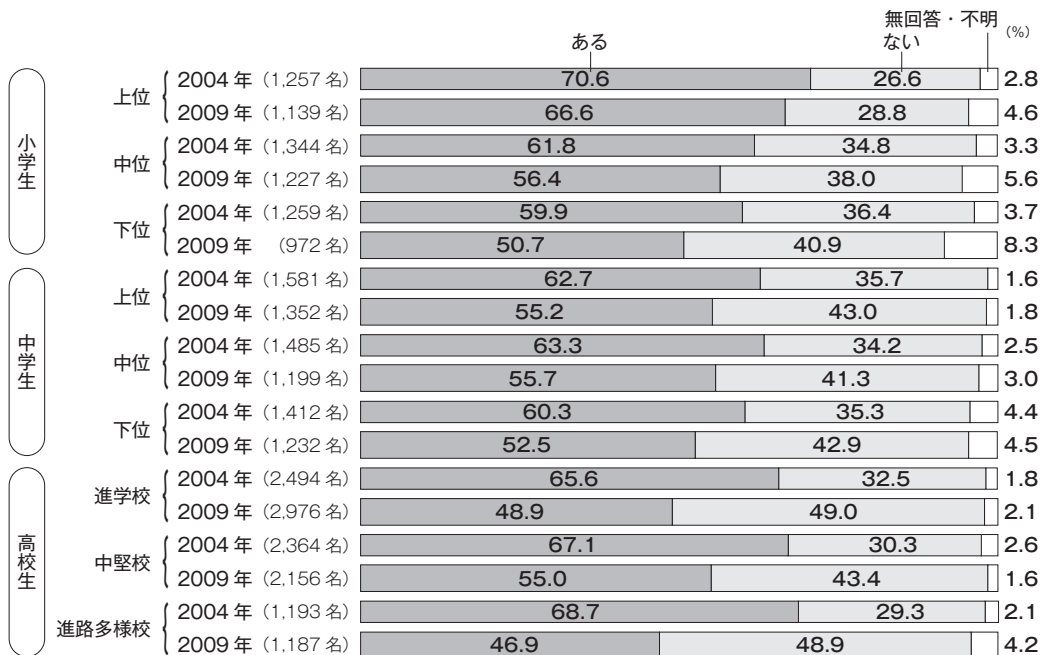


表4-2-3 なりたい職業の有無（高校生、高校偏差値層別・性別、経年比較）

	進学校				中堅校				進路多様校			
	男子		女子		男子		女子		男子		女子	
	2004年 (1,308名)	2009年 (1,569名)	2004年 (1,177名)	2009年 (1,404名)	2004年 (1,247名)	2009年 (1,138名)	2004年 (1,102名)	2009年 (1,015名)	2004年 (615名)	2009年 (599名)	2004年 (574名)	2009年 (586名)
ある	59.8	44.6	72.3	53.8	61.5	44.6	73.4	66.7	63.1	39.2	74.6	54.9
ない	38.1	53.2	26.3	44.1	35.2	53.7	24.8	31.7	35.3	56.6	22.8	40.8
無回答・不明	2.1	2.2	1.4	2.1	3.3	1.7	1.8	1.6	1.6	4.2	2.6	4.3

表4-2-4 なりたい職業の有無別にみた希望する進学段階（高校生、経年比較）

	2004年		2009年	
	なりたい職業ある (4,042名)	なりたい職業ない (1,877名)	なりたい職業ある (3,199名)	なりたい職業ない (2,972名)
高校まで	5.8	5.4	5.0	5.9
専門学校・各種学校まで	16.9	6.4	12.4	4.5
短期大学まで	3.7	2.1	3.3	1.2
大学（四年制）まで	51.3	59.6	53.9	62.6
大学院（六年制大学を含む）まで	16.0	9.3	17.8	10.5
その他	0.4	0.2	1.0	0.2
まだ決めていない	5.2	16.5	5.9	14.3
無回答・不明	0.6	0.5	0.8	0.8

4. 将来の職業について（2）

小・中学生の男子が、将来なりたい職業の上位は、「野球選手」「サッカー選手」で、スポーツ選手は不動の人気。小学生女子では、「ケーキ屋さん、パティシエ」の人气が急上昇。中・高校生の女子では「保育士・幼稚園の先生」が第1位となった。高校生男子では「学校の先生」「公務員」と堅実な職業が上位を占めている。2004年と同様、2009年においても、高校生になると男女とも現実的な職業が上位に入ってくる。中学生から高校生にかけてが、職業を現実的に考える分水嶺となっているようだ。

◆小学生のなりたい職業の変化

－男子でスポーツ選手が不動の人気

小学生男子が将来なりたい職業には、「野球選手」「サッカー選手」が上位を占めた。これは2004年と同じ順位であり、スポーツ選手は不動の人気職業といえる。また、2009年では「芸能人（俳優・声優・お笑いタレントなど）」が2004年の第14位から第7位に急上昇している。

女子では、「ケーキ屋さん・パティシエ」が2004年の第5位から第1位へと上昇した。ついで、「保育士・幼稚園の先生」「芸能人（俳優・声優・お笑いタレントなど）」「看護師」と続いている（表4-2-5）。

◆中学生のなりたい職業の変化

－女子で「医師」がランクイン

中学生男子においても「野球選手」「サッカー選手」といったスポーツ選手の人气が依然として高く、「芸能人（俳優・声優・お笑いタレントなど）」も順位を上げて第3位となった。また、2009年では「調理師・コック」「大工」といった技能職や「研究者・大学教員」といった専門職、「コンピュータープログラマー・システムエンジニア」といった技術職が軒並み順位を上げて第10位以内にランクインしている。

女子では「保育士・幼稚園の先生」が第1位となっており、こちらも不動の人気の職業である。つづいて「芸能人（俳優・声優・お笑いタレントなど）」「ケーキ屋さん・パティシエ」が

順位を上げて第2位、第3位となっている。またそれ以外の職業では、「医師」が2004年から大きく順位を上げて第10位以内に入ってきている（表4-2-5）。

◆高校生のなりたい職業の変化

－男子で専門職、技術職が人気に

高校生の男子においては、「学校の先生」「公務員（学校の先生・警察官などは除く）」といった職業が2004年から継続して上位に入っている。また、「研究者・大学教員」といった専門職、「コンピュータープログラマー・システムエンジニア」といった技術職、「芸能人（俳優・声優・お笑いタレントなど）」も大きく順位を上げている。

女子においては、2004年から順位に大きな変化はみられず、「保育士・幼稚園の先生」「学校の先生」「看護師」といった従来から女性が多く活躍している職業（＝ピンクカラー職）の人气が依然として高くなっている（表4-2-5）。

◆「芸能人（俳優・声優・お笑いタレントなど）」の人气が上昇

2009年の特徴をまとめてみよう。特徴的なのは、学校段階別、性別を問わず、「芸能人（俳優・声優・お笑いタレントなど）」の人气が上昇していることである。ここ数年続いたお笑いブームの影響や、インターネット上で芸能人が自分の日常をブログなどで紹介したりしていることで、子どもたちがこうした職業を身近に感じる

ようになってきているのだろうか。

男女差をみてみると、小・中・高校生とも男子は従来から男性が多く就いてきた職業を、女子は女性が多く就いてきた職業を希望する割合が高いという傾向が依然として続いている。しかし、その中で、女子において「医師」が上昇

傾向にあり、今後の変化が期待される。

2004年と同様、2009年においても、高校生になると男女とも現実的な職業が上位に入ってくる。中学生から高校生にかけてが、職業を現実的に考える分水嶺となっているようである。

表4-2-5 「なりたい職業」ランキング（学校段階別・性別、経年比較）

小学生

男子				女子			
		%	順位(2004年)			%	順位(2004年)
1	野球選手	10.4	1	1	ケーキ屋さん・パティシエ	6.6	5
2	サッカー選手	6.3	2	2	保育士・幼稚園の先生	6.4	1
3	医師	2.0	3	3	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	4.7	4
4	研究者・大学教員	1.9	4	4	看護師	3.4	2
4	大工	1.9	4	5 ↑	デザイナー・ファッションデザイナー	3.3	11
4	ゲームクリエイター・ゲームプログラマー	1.9	7	6	医師	2.5	8
7 ↑	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	1.6	14	7	理容師・美容師	2.3	7
8	バスケット選手	1.4	9	7 ↓	マンガ家・イラストレーター	2.3	2
9	調理師・コック	1.3	8	9	学校の先生	2.2	6
9	会社員	1.3	12	10	ペットショップ	1.8	12

中学生

男子				女子			
		%	順位(2004年)			%	順位(2004年)
1	野球選手	4.6	1	1	保育士・幼稚園の先生	9.5	1
2	サッカー選手	3.4	2	2	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	5.6	4
3 ↑	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	1.7	8	3 ↑	ケーキ屋さん・パティシエ	3.5	8
4	学校の先生	1.6	3	4	看護師	2.9	2
5 ↑	調理師・コック	1.5	11	5	マンガ家・イラストレーター	2.8	3
6 ↑	研究者・大学教員	1.4	11	6	デザイナー・ファッションデザイナー	2.5	9
6	医師	1.4	4	7	動物の訓練士・飼育員	2.1	7
6	公務員(学校の先生・警察官などは除く)	1.4	5	7	理容師・美容師	2.1	5
9	ゲームクリエイター・ゲームプログラマー	1.1	8	9	学校の先生	1.8	6
10	コンピュータープログラマー・システムエンジニア	1.0	13	10 ↑	医師	1.2	圏外
10 ↑	大工	1.0	15				

高校生

男子				女子			
		%	順位(2004年)			%	順位(2004年)
1	学校の先生	4.7	1	1	保育士・幼稚園の先生	5.3	2
2	公務員(学校の先生・警察官などは除く)	3.6	2	2	学校の先生	5.1	1
3	研究者・大学教員	2.7	7	3	看護師	4.8	3
4	医師	2.3	3	4	薬剤師	2.9	4
5 ↑	コンピュータープログラマー・システムエンジニア	1.7	12	5	理学療法士・臨床検査技師・歯科衛生士	2.4	5
6	警察官	1.4	6	6	公務員(学校の先生・警察官などは除く)	2.3	6
6	薬剤師	1.4	5	6	医師	2.3	7
8	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	1.3	11	8	芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)	1.5	12
9 ↓	理学療法士・臨床検査技師・歯科衛生士	1.1	4	9	栄養士	1.3	8
9	技術者・エンジニア	1.1	8	10	カウンセラー・臨床心理士	1.2	10
9	法律家(弁護士・裁判官・検察官)	1.1	9				

注1) ↑↓は2004年から5つ以上順位が変化した職業。

注2) 将来なりたい職業名を具体的に書いてもらった結果を分類して作成した。明確な職業名に分類できないものは除外してある。また、比率(%)はなりたい職業が「ない」と回答した人や無回答だった人も母数に含めている。

5. 将来の職業について（3）

全体的に、中・高校生ともに大きな変化はみられない。「安定していて長く続けられる」「自分の好きなことがいかにせる」ことを重視しており、職業選択における安定志向、好きなこと志向が継続している。一方、「独立して自分だけでできる」を重視している割合は2004年同様、7項目中でもっとも低く、2009年ではさらに減少傾向にある。最近の不況や不安定な労働市場の状況を反映し、子どもたちの職業に対する安定志向の強まりや独立志向の低下といった動きがみられる。

◆職業選択における安定志向が継続

この5年間で、子どもたちが職業を選択する際に重視するポイントに変化はあったのだろうか。2009年では2004年と同じく、職業を選択する際に重視することを7項目あげて、回答を求めている。学校段階別に経年比較をした結果を図4-2-10に示した。

全体的に、中・高校生ともに大きな変化はみられない。「安定していて長く続けられる」「自分の好きなことがいかにせる」ことを重視している割合が、2004年と同じく9割以上となっており、職業選択における安定志向、好きなこと志向が継続している。加えて「大きな会社である」ことを重視する割合が、中学生で5.3ポイント（2004年47.2%→2009年52.5%、以下同）、高校生で9.0ポイント（41.4%→50.4%）増加しており、中・高校生とも大きな企業で安定した職業に就くことを希望している。

一方、「独立して自分だけでできる」を重視している割合は2004年同様、7項目中でもっとも低く、2009年ではさらに微減傾向にある。最近の不況や不安定な労働市場の状況を反映してか、子どもたちの職業に対する安定志向の強まりや独立志向の低下といった動きがみられる。

◆女子の大企業志向が増加

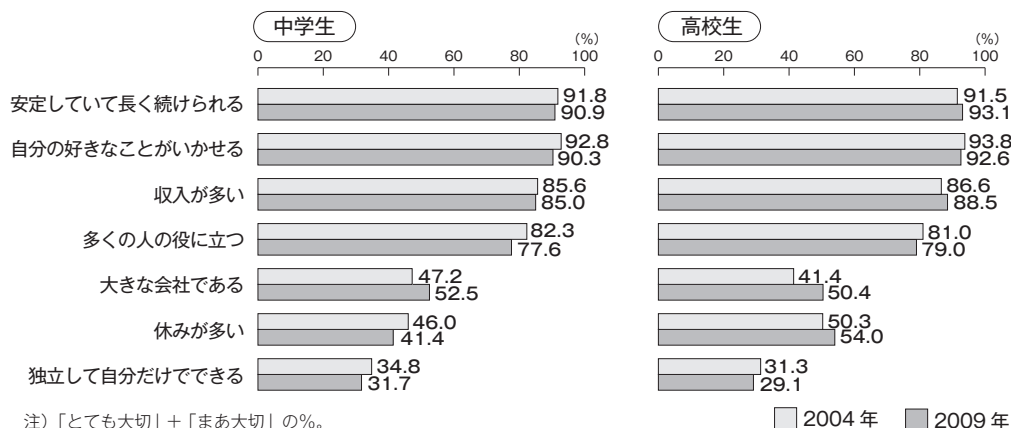
職業を選択する際に重視することについて、学校段階別、性別で経年比較を行った結果を図4-2-11と図4-2-12に示した。まず、

この5年間の変化に注目すると、中・高校生の男女とも「大きな会社である」ことを重視するようになっている。とくに女子においてその傾向が強くみられ、中学生女子で7.2ポイント増（42.2%→49.4%：「とても大切」+「まあ大切」の合計、以下同）、高校生女子で8.7ポイント増（38.6%→47.3%）となっている。一方、「独立して自分だけでできる」を重視している割合は、女子で低下が大きくなっている。とりわけ中学生女子で5.7ポイント減（35.4%→29.7%）となっている。

次に性別に注目してみると、中・高校生とも、男女で大きな差はみられず、「安定していて長く続けられる」「自分の好きなことがいかにせる」が高い割合となっている。

しかし、「とても大切」と「まあ大切」を分けて細かくみていくと、職業選択に際して「収入が多い」ことを「とても大切」と回答している割合は、2009年を例にすると、男子が40.1%、女子が28.9%でその差は11.2ポイントとなっている。同様に「大きな会社である」ことを「とても大切」と回答している割合は男子で19.3%、女子で11.7%（いずれも2009年）となっており、7.6ポイントの差となっている。男子においては、収入や大企業といった経済的安定志向が女子よりも強くなっており、将来の家庭の経済的側面を担うという一般的な性役割の構図を反映しているものと考えられる。

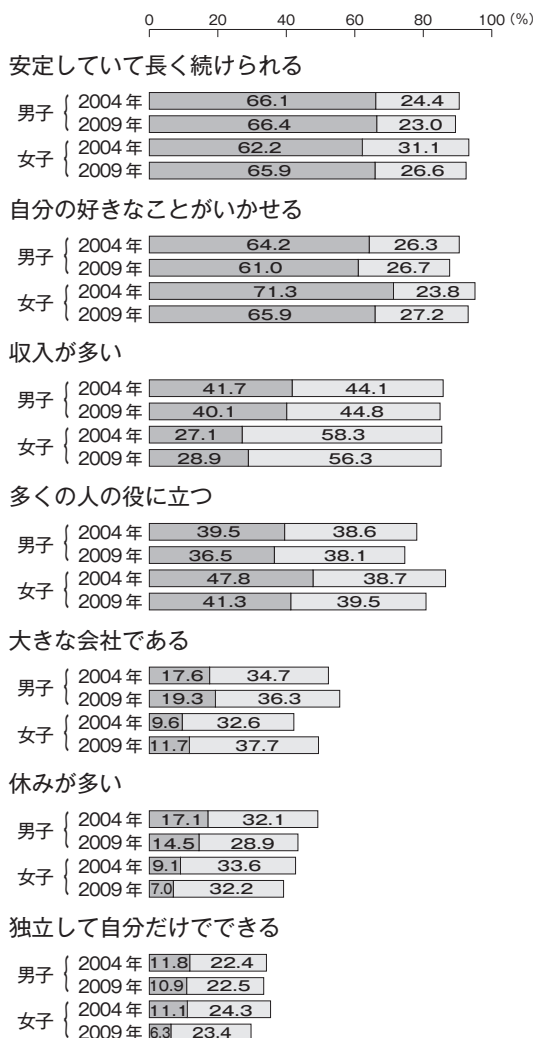
図4-2-10 職業を選択する際に重視すること（中・高校生、経年比較）



注) 「とても大切」+「まあ大切」の%。

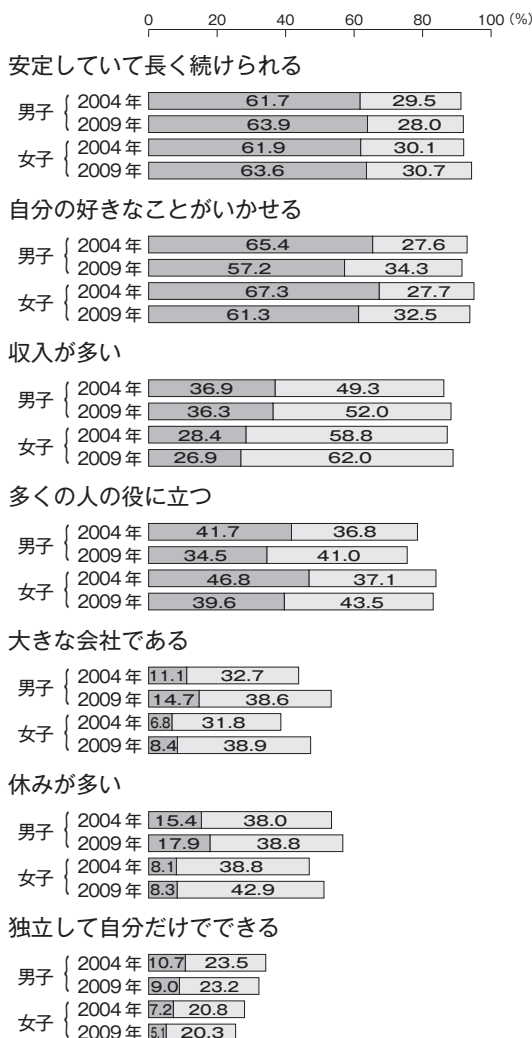
□ 2004年 ■ 2009年

図4-2-11 職業を選択する際に重視すること（中学生、性別、経年比較）



■ とても大切 □ まあ大切

図4-2-12 職業を選択する際に重視すること（高校生、性別、経年比較）



■ とても大切 □ まあ大切